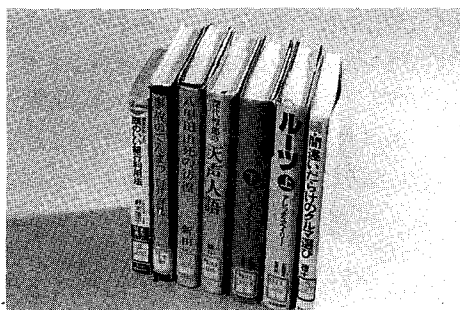


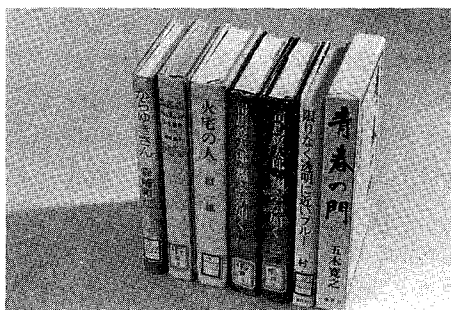
図書館たより

号数 第40号
 発行日 昭和53年10月25日
 編集行 島根県立図書館
 松江市内中原町52
 TEL (0852)22-5275
 印刷 ふなき印刷

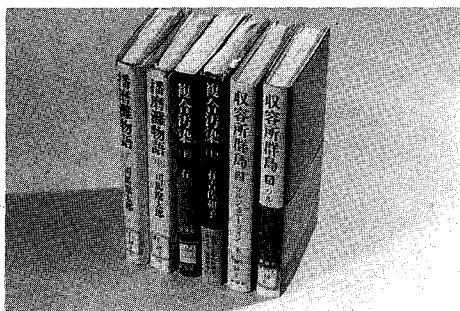
昭和五十二年



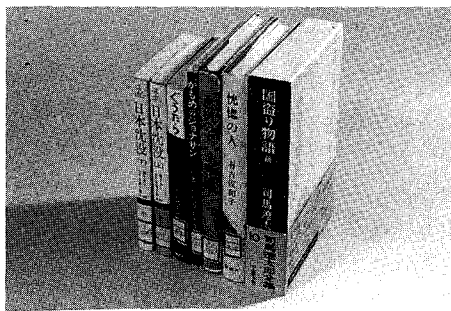
昭和五十一年



昭和五十年



昭和四十八・四十九年



(ベストセラーズ・あの本この本)

洛陽の紙価

言葉の乱れ、ということが、最近よく話題にされる。これは、その例にあてはまるかどうかかわからぬが、こんな話を聞いた。「情は人のため●ならず」という格言があるが、この意味を中学生にたずねたら「人に情をかけることは、過保護になったりして、その人の為にならない。よくないことだ。」と答えたそうである。

なるほど、日本語はむづかしい。噴飯ものの解釈だが、誤解のよって来たる原因はわからんでもない。この伝でいくと、「洛陽の紙価を高める」という故事など、さしあたってどう解釈されることになるのだろうか。

いうまでもなく、著作が好評を博して、よく売れる意で、いわばベストセラーを言う言葉だが、さきの中学生某君に解釈させたらどう答えるだろう。

あるいは、中央の大出版社が、次々と洪水のように本を世に送り出すため、紙の値段が上がること、と言うかも知れない。面白半分も手伝って、架空の誤解を想像してみたものの、ふと考えさせられてしまった。

最近、図書の価格が、どれぐらい上昇したかは知らないが、一寸手頃な本なら千円台にのっているはずだ。本もうかうか買えないことになった。

そこで思うことだが、今や買うより借りる、ということ提言したい。近くの図書館その他の読書施設を大いに利用して、効率的、経済的に文化的欲求を満足させることを、もっと考えてよいのではないか。生涯教育ということが叫ばれる時代になって、これは、その時代に即応した、一つの知的生活の技術だと思うのである。

島根県教育委員会教育長 水津卓夫

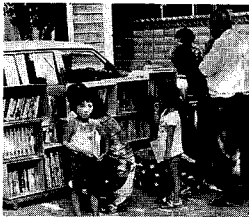
多伎町における 自動車文庫の活動状況

わが多伎町は島根県の中央、簸川平野の西端、石見との境界に位置し日本海に面した三村合併により出来た農山漁村で人口は約 4,500の小さな町です。

図書室のある公民館は国道、県道から入った高台にあり、日本海が一望出来る環境のよいところにあります。しかし公民館の図書費で購入した本も、県立図書館で借りた 300冊の本も成人の利用者は極めて少なく、殆んどが近隣の小・中学生に限られ、住民にとって縁遠い存在になっていました。

この現状から、1人でも多くの住民に利用してもらうために始めたのが自動車文庫です。「あした天気でありますように。」自動車文庫の配本日の前日はいつも祈っています。なぜならこの文庫は青空図書館だからです。始めてやっと4ヶ月、月2回の配本で8回終えたところ です。

本箱はダンボールのみかん箱。24、5冊の本を詰めたもの10数箱、町のライトバンに積んで出発です。現在町内4ヶ所にステーションを置



(青空図書館の貸出し)

き、それぞれ40分間の停車で貸出しをしています。ステーションに着きますと、車から箱を降して地面にならべます。はじめは広げても中々利用者がなくダンボールの本箱を重く感じました。折角はじめたことです。ここでくじけてはと、次の貸出し日は出発前に電話でさそい、ステーションに着くと「図書館が来ましたよ」と、呼びかけ5ヶ月たった此の頃は到着をステーションで待つてくださるようになり、重量感も、夏の暑さも吹き飛んでしまいました。野良仕事に行く人が、集まりを見て「今日は何ごとかね、わしも本が借りたいが今から田へ行くのでね。」「おじさん、私が持って帰ってあげるわ。」「ほんならお金も立て替えておいて。」「お金なんかありませんよ。」等ほほえましい会話も聞かれるようになりました。また、あるお母さんは「毎月本を買っていたのに、この頃は本代が浮いて助かります。」また、「この本、とてもおもしろかったわ、あなたも読んでみない。」と友達に勧められたり料理の

本を手にも、調理方法、漬物の話など、ここが青空料理教室になることもあります。時には、おばあさんが「孫が本を借りていて。と云いますがどんな本がいいでしょうか。」と相談を受けることもあります。

貸出し手続きは貸出しカードを取り、係が貸出し簿に記入するだけ、これには書名、氏名、電話番号を記入するようにしています。貸出し冊数の制限はしていません。返す時もカード入れは係がしますので利用者は本を選ぶだけです。

しかし次のような問題点もあります。

1. 一番困るのは雨天の際はどうするか。
(開設以来まだ一度も雨にあってない)
2. 専用自動車でなく積載量が限られている。
3. 利用率に格差があるステーションの再編成と増設計画。
4. 利用者の要望に応えられる資料の整備
5. 職員が日常業務時間を割愛しての活動であるため人客不足
などがありますが、県からは特別利用で1000冊の貸出しをしていただき、同時に町では自動車巡回用本箱15箱整備しました。

県下読書施設の横顔(2)

ユニークな活動を中心に



自動車文庫は、本を読む楽しみを広げてゆく働きをもっています。誰もが待っている新しい、楽しい本を積んで行くことが大切だと思います。自動車で運ぶの

で自動車文庫。地面に置くので青空図書館開設後、日も浅く、どちらを呼んでよいやら名前もつきていない現状で、特筆大書すべき何もないので4ヶ月の感想をのべて終ります。

— 多伎町自動車文庫の概要 —

車	輛	トヨタカラーバン	1400cc.
巡回	回数	各所 月2回	(1日・15日)
駐車	時間	各所	40分
図書	購入費	昭和53年度	10万円
		昭和54年度	20万円(予定)
公民館	蔵書数	650冊	
整備	備品	配本用本箱 15箱	
貸出	統計		

月	5月	6月	7月	8月	9月	計
貸出冊数	130 (4月分)	260	187	221	201	999

(多伎町 教育委員会)

特集 高齢化社会と読書

松江市上乃木町
高橋 匡夫 75才

松江市北田町
諏訪部 綾子 72才

「万物ヲ曲成シテ遺サズ」これは易経の中の一句です。私が昭和10年、東京目黒にあった「国民文化研究所」で当時の東大教授紀平博士より易経の講義の時に学んだ一句です。私の50年間の教員生活のもっとも大切な舵なのです。

古人は、読書においては必ず「一生受容シテ尽キズ」に価するものを発見せよといわれたものです。先の易経の言葉を申しますと、易の精神、万物（自然界、生物界、人間界）全てにおいて、そのものの本性を活かして全宇宙の完成をなせとのことです。この言が私に受容して尽きざる恵みとなったのです。

私は新聞、週間誌、その他の軽い読物は昼間に読みますが、宗教書、思想書、詩等は夜中の午前零時より4時の間に読むことにしています。（私は普通夕方6、7時に就寝。従って、零時には目覚めます。）そして、何度も何度も繰り返して読みます。大体、三度から五度ぐらい読むと本を読んでいるというよりは、自分のものを発表しているようになります。その本と、私が一体になったようになります。

今頃の読書、といえば、マンガと同じで（マンガが価値が無いといっているのではない）身に付いていません。私は柔道をやりますが、本をみるだけでは上手になれません。昔の人がしたように、読書でもその他の教育でも、「素読」「棒暗記」の要素が必要ではないでしょうか。

読書の醍醐味は、静浄なる環境のもとに、じっくりと本に親しむうれしさにあり、何かある毎に私を導いてくれることにあります。それが、今考えてみるとかつての素読・叱られながらした棒暗記がその根底にあるのを発見して驚いています。

私は、近頃日本のものでは「歎異抄」、キリスト教のものでは「ロマ書」を、それぞれ、愛読書以上の指針書、いや、私の母の言葉として親しんでいます。

明治39年生れ、丙午の私は、大正の中期（8年4月～13年3月）の女学生であった。教科書一本で、私の場合、文学書等見たこともなく、そんな話を聞く時間もなかった。軟派 — 文学少女と云われた友達は、厳禁された恋愛小説等、先生の目を盗んで回し読みをしていた。

読書会 数年前、図書館主催の〔読書会〕が始まった。生活も何とか落ちつき、時間も完全に自由。「そうだ、人並に読書位しなくちゃ、生涯の損だ」趣味があったわけでもなく、唯ばく然と仲間入りした私であった。

本は一人で静かに読み、自分流に解釈、感銘、心の糧とすれば充分と勝手にきめていた愚かさ。

昭和49年頃、読書会でとりあげた〔青春の蹉鉄〕（石川達三）当時の事をよく思いだす。午前中の講座を終え、集会室の一隅に陣取った10数名は、昼食を取り乍ら、我先にと話しあった。Aは「賢一郎の母の気持ちがねえ…」と涙ぐんだ。K「ねえ、大学の図書館閲覧室って、どんなになっているかしら？」何を途方もない事を……と聞いたら「賢一郎が留置場の中で幻に見たで

しょう」と真顔でいった。誰かが「社会が狂っている」と。「登美子は、うちの孫に似ている。どうしよう…」Mはそう話した。私は「もう一度、否二、三度くり返し読もう」といった。

9月15日〔敬老の日〕松江市から〔寿〕長寿の祝として1,500円贈られた。私は書店のベストセラーの書棚の前に立ち「誰かこの中から選んでくれなにか」しばらくキョロキョロしたが駄目。

〔北条政子〕（永井路子）〔人びとの中の私〕（曾野綾子）の二冊、1,800円也。少しオーバーしたが大切にかけ、街へ出た。

眼鏡もあわないし、頭もボケがちだが〔寿〕にいただいた書として、秋の夜、ゆっくり読みたいと、楽しみにしている。

私と読書

日本人の平均寿命はさらにのび、今や世界の一、二位を争う最長寿国となった。そして、マスコミでは、高齢化社会問題をテーマにした出版物が注目をあびてきた。そこで、当館所蔵の「高齢化社会」に関する図書の中から数冊紹介してみよう。

老年学入門 湯沢雅彦編 有斐閣双書

老年学は医学、生物学からの老年医学と人口学、経済学、社会学、心理学、社会福祉、保険、医療などからの社会老年学とにわけて考えられている。

この本は社会老年学を中心に老化の分析から生活保障、福祉サービスまで幅広く取り上げて問題提起をしている。特に老年学を学習してみようという人には手ごろな入門書である。

夫と妻のための老年学

水野 肇著 中央公論社

40才になったら自分の老後を真剣に考えることだ。主に中年者を対象に老年のあり方を説いた本である。

老化を自分のこととして率直に受けとめ、心の喜びを感じるものを若い時から持つように勧めている。それは何でもいい。それをやれば、没頭できて、すべてのことを忘れるぐらいのものを、趣味としてもつことが必要だという。そういうものをもっておれば、老後も楽しく過せる。要は自分自身が老年というものを考え、自分の老後の人生を自分で考えることがしあわせにつながると説いている。

老人問題とは何か

森 幹郎著 ミネルヴァ書房

今日の老人問題を高度経済成長の所産としてとらえている。これからの老後の責任は、子どもが自分の親について直接1人1人が負担する形ではない。子ども世代が老人世代に共通に負担する形に変わった。つまり社会が公的に面倒をみれば老人問題はほとんど解決されるという。しかし、心の問題は別で老後への準備、死への準備をしておくことが必要だという。

老人と性

日常出版

とかく疎外されがちな老人問題。そのうちでも特に無視されている老人の性に焦点をあて、性を単に種族保存のためとみないで人間関係をつなぐ友愛とし、性を広い意味でとらえている。潤いのある生涯を送るためには老人こそ性にめざめることが必要だという。老人を性の面から見直し、老人に対する理解と思い遣りを深めることこそ老人のしあわせ。

老人扶養を考える

一家庭裁判所にみる紛争とその解決—
永井輝男著 老人福祉双書

多年調査官として東京家庭裁判所に勤務した著者が、持ちこまれた各々の老人の扶養をめぐる事件をとりあげ、そこからいろいろな問題点を提示し、解決を求めたもの。

老人問題 N.ロバーツ著

三浦文夫監訳 東京大学出版会

本書は有名な全国老人福祉協議会(NOPWC)の活動に焦点をあて、その活動と関連してイギリスの老人福祉施策とサービスの展開を取り扱ったもの。

中・高年者のスポーツと健康

小田俊郎著 創元医学新書

中・高年者向けのスポーツと、健康の関係を解説し、スポーツする中・高年の人々の健康増進・老化抑制・障害防止をのべたもの。

上手に年とる法

水野 肇著 婦人生活社

老化は病気ではない。自然の時の流れである。年相応の健康管理と生きがいをもつ生活をするのが大切だと説く。

長生きと若返り 木崎国嘉著 創元医学新書

人類の最大の願望である長生きと若返り。この人類の悲願を人間は古くから研究しつづけてきた。本書はこの研究、方法をのべたもの。

世界一長寿村の謎 D.デビーズ著 双葉社

南米エクアドルにある世界一の長寿村ビルカパンバ。この村の人達の食べ物、気候、風土、習慣、家族生活等を多面的にとらえ、長寿との関連を見つけようとしたもの。長寿と環境との因果関係を探るうえで参考になる。



読書会紹介 No. 4

読書会名 波の穂グループ
所在地 大田市波根町1751-2 波根公民館
住所 大田市波根町626-2
代表者 氏名 川上 幸子
会員数 10名
定例日・時 隔月 直前例会で決定 20:00~22:00

波の穂グループは、親子読書会のメンバーであった母親たちが読書の習慣を更に進めて、自分自身の生活のうおいと豊かな心を養いたいとの願いから、49年9月に発足しました。

会員の平均年齢39.7才。いずれも小学生から大学生までの子女の母親。職業は様々です。

定例会は読書の感想発表と話し合いを行なっています。その他講師の招へい、他の読書会との交流を行っており、本年は大田市教育委員会の芝尾先生から親子読書会の活動状況をお伺いし、他の読書会の紹介と運営についての助言を頂きました。また渡辺和子先生（ノートルダム清心女子大学長）の講演テープ『たいせつなもの』（注）を聞く会をもちました。

読書会名 川津読書会
所在地 松江市西川津町1254 川津公民館
住所 松江市西川津町3174
代表者 氏名 久保田 節子
会員数 25名
定例日・時 毎月第2月曜日 9:30~11:30

一発足一

私たち川津読書会は昭和49年に誕生して、すでに4年を経過いたしました。その成立当時を回想してみますと、きわめて自然発生的に、自発的に誕生したのではないかと思います。

当時、川津幼稚園のお母さん方の、子どもたちにどんな本を読ませたらよいか、本に親しませるにはどうした方がよいか、本の内容をどんな風に指導した方がよいかという要望に答えて、土江園長がその話し合いの場としての読書会を川津公民館に依頼されてできあがりしました。

一経過一

最初は幼児の本だけを対象にして話し合いをやりましたが、折角、皆さんが集って幼児の本だけでは物足りない、大人の本も合せて読み合せをやりましようと言うことになり、早速、県立図書館の指導を受けて、読書会用の本を利用させていただくことになりました。

ところが大人用の本は一組10冊と揃っていますが、幼児の本は各自、持寄りの本で全員同じ本で話合

会は、波根公民館の協力を得て運営していますが、月当番（2名ずつ輪番制）で図書の選定、会合日の決定、記録など一切の世話を行ないます。図書はすべて県立図書館の貸し出しを受けていましたが、最近大田市直立図書館のものも利用しています。グループで購入した図書は20冊とささやかですが、会員自身で選んだものだけにフル回転しています。読書は、小説、教育論、随筆等巾広いものになっていて、発足以来60冊に達しています。

作品を読んで、自分の生活体験から論評したり、社会とは、教育とは等々知らず知らず討論になって時間を忘れることもあります。評判が良かったのは三浦綾子『細川ガラシャ夫人』、西村滋『妻よ男の見る夢は』など。時代の流れに押し流されながらも生きる人間の強さ、生きざまに感動しました。

機関紙の発行や文集を作りたい希望を持っていますが、まだグループの歴史も浅く、いまは会員の心の触れ合いを大切に、あまり気負いこまないで楽しめる集りになるようみんなで話し合っています。

（注）大田ロータリークラブ提供。年次大会記念講演。

（文責 川上 幸子）

ということができませんので一同相談して、県立図書館で、10冊一組の幼児の絵本を買っていただくように、お願いしましたところ、快く聞き入れていただきました。これまた同じ絵本で話し合うことができるようになりました。

一方法一

読書会は毎月第2月曜日の午前中、子どもたちが学校にいつている間に、公民館で行っています。そして運営は当番制として、当番は会場作り、湯茶の用意をします。話合ったことは、記録をして、これをコピーして、次の読書会に配布し、先月の読書会の反省の資料としています。

一子ども図書館・読書散歩など一

私たちの読書会は、親と子の読書活動であると共に、大人相互の教養を深めるための活動であります。こうしたことから、公民館に「親と子の図書館」を作ろうという議が持ち上がり、市教委の援助のもとに公民館の一部屋に「親と子の図書館」を作り上げました。始めは200冊ばかりで出発いたしました。購入・寄贈等により現在800冊に達しています。この外に、毎月松江市子ども図書館から100冊、県立図書館から、大人用図書100冊借りて運営しています。

毎年春秋の2回、会員による文学散歩・歴史散歩を行っています。今まで、広瀬月山、玉造公園、ヘルン遺跡、楽山公園等の散策を行って親睦を深めています。
（文責 川津公民館・音羽融）

読書会用 新刊図書紹介

読書会用図書として、1セット10～15冊揃えています。毎年、目録を作成し、配布していますが、4月以降の新着図書5セットを紹介します。どうぞ、グループの読書会にご利用下さい。

(申込先・島根県立図書館管理課普及係) TEL・0852・22・5730



ぼくがぼくであること

山中 恒著 実業之日本社 980円

小学六年生、秀一の母親は、典型的な教育ママである。5人兄弟の中でも一番出来が悪く、期待にそわない秀一には過干渉さみである。何しろ、授業中の態度は悪く、目につくヘマが多すぎるからである。秀一は、年中家へ帰りたくなく、蒸発したいとさえ考えている。ところが、ある日、はずみで家出をする。ある農家で一夏を過ごし、そこの孫娘と親しくなり、親子の意味、自立することの意味を考える。

著者は、単に教育ママを批判するだけでなく、社会全体の問題として、登場する子ども達に、学校教育、家庭教育のあり方を考えさせている。

大人からの押しつけや、干渉に対して、個としての子どもの自立をとりあげ、“自分が自分である”ことの意味を問いかけている。(対象：小・高学年)



死にたがる子

藤原審爾著 新日本出版社 960円

最近、相次いで子どもが簡単に死に走る。原因が明確な場合もあれば、「理由なき死」として片付けられることもある。

中学生の自殺という現実的な社会問題をテーマにした本書は、一新聞記者の執拗な取材活動によって、それを深くほり下げたもので、多くの示唆を与えてくれる。

著者は、自殺の原因を、家庭における人間関係の希薄化、また生きるという姿勢の意欲減退に焦点を合わせている。人間関係、特に親子間には、いかに愛情が大切であるか、その上に築かれた家庭こそ本物であると今更ながら痛感する。

子どもには、目いっぱい力を出せるように庇護し、生命の重さを是非伝えねばならない。



家族を中心とした人間関係

中根千枝著 講談社 260円

私たちは社会生活において、さまざまな人間関係をもっている。なかでも家族との人間関係は、もつとも頻度が高く、また、なによりもまず家族のなかで、その社会における人間関係の基本的なものを身につけていくわけである。そして、幾多の人間関係のなかでも非常にやっかいな問題が発生するのまたこの家族というもののなかからなのである。

本書では、社会学的な諸要素を分析し、日本の家族の時代的変遷を加味しながら、今日の問題に密接に関係する側面を考察している。そして、より本質的な対応を可能とする道を、終始、冷徹な目で指摘している。

算数病院事件

後藤竜二著 新日本出版社 980円

みんなが算数のできる子になろう——と、ともに先生が提案してできた「算数病院」・80点以上とれない、鉄二・完太・デンゾーは今日も放課後、入院させられた。ところが、算数のできる“医者”服部くんが、突然“医者なんかやめたぞ。きみたちティノーなんか教えない”と怒って帰ってしまった。さあ、5年3組は大さわぎ。

子ども達をなんとか算数好きにさせようと努力する先生、そして教育ママの抗議。子ども達の団結、と街角や教室のどこにでもいる子ども達の日常生活を生き生きと描いている。

書名のつけ方もおもしろく、“算数”に着眼したところなどユニークである。(対象：小・高学年)

伸 予

高橋授一郎著 文芸春秋 780円

未亡人の元教師が、30年前のうら若い頃の思い出とたわむれ、結果、われとわが身をさいなむ。新人作家とは思えぬ程、重厚な文章で、中年女性の恋を、あわれに、またかわいく描き出している。今年度、芥川賞受賞作品。

郷土資料モニターの発足

図書館活動のなかで、郷土資料の収集とその活用は大きな柱である。近来、郷土に対する関心がたかまり、県立図書館郷土資料室には、調査研究のため多くの利用者が訪れ、また、電話や手紙による問い合わせもかなりの件数におよんでいる。しかし、当館郷土資料室は、これら利用者の要求に応えるにはまだ充分とはいえない。県内には埋もれた資料がまだまだ存在するし、新しい資料もどんどん刊行されている。それらをできる限り収集して、利用者に提供しなければならない。

そこで当館では、県内の郷土資料に関するあらゆる情報を収集し、その所在の把握と、当館郷土資料室の充実のため、郷土資料モニターの制度を企画し、11月1日から発足することにした。モニターには、地域の諸事情に通じたかたを各市町村教育長に推せんしてもらい、73名を委嘱した。モニターは、当該市町村内の郷土資料に関する情報を、随時県立図書館に通報してもらう。通報の内容は次のようなものである。

- (1) 市町村内における個人、グループ等の刊行物。
- (2) 新たに発見された古文書、古書、古新聞、古写真、古絵画など。
- (3) 所在のわかっている郷土資料の所蔵状況。
- (4) 農協、商工会、観光協会、婦人会など各種団体の刊行物。

このような資料に関する通報をうけた県立図書館では、さっそく購入、寄贈、複写等の方法で積極的に収集をはかるしくみである。

モニター制度の積極的運用によって、密度の濃い、しかも地域的ばらつきのない収集が可能となり、当館郷土資料室は一段と充実し、利用者の調査研究に資することになる。

郵送による貸出制——メール制が発足してから5年、現在では送料も片道県費負担となり、利用者も増え、登録者200余名、月平均利用件数32件、75冊になった。

いつでも、どこに居ても、県立図書館の本が利用できるようにと、遠隔地居住者および身体の不自由な方を対象に、郵送によって貸出を行うのがメール制である。しかし、まだまだPR不足でこの制度を知っている人は多くなく、実際に利用している人となると、さらに少ないのである。今後、周知徹底に努力して、県内全地域の方がたに、一冊でも多く県立図書館の本を利用してもらいたいものである。

最近、江津市立図書館では、県立図書館の本を効率的に利用しようとする注目すべき試みを始めた。

同図書館では、利用者の求める本がない場合、県立図書館の蔵書目録を調べ、利用者にとって請求する。県立図書館はこれに応じて本を江津市立図書館に貸出し、さらに同図書館から利用者へ貸出する方法である。今のところ月一件程度だが、利用者にとって、たいへん便利なサービスにちがいない。

実は、このような図書館間の資料の貸借は、相互貸借といって、図書利用の効率という点で、きわめて重要であり、図書館法第三条にもうたわれているのだが、本県ではいたって不活発であった。それだけに、江津市立図書館の試みは、相互貸借の芽生えとして、画期的といえよう。これを契機に、全県のひろがりをもつ相互貸借に発展することがのぞまれる。

県立図書館の資料は、近隣に居住する方がたが利用するものでは勿論ない。県民全体に利用してもらわねばならない。そのためには、メール制や相互貸借制度をもっともっと利用していただきたいものである。

相互貸借のめばえ

